19 世紀末のクロワッサンとその周辺地域の方言における *ciseau, râteau, oiseau* の単数形、複数形

Le singulier et le pluriel de *ciseau*, *râteau*, *oiseau* dans le dialecte du Croissant et sa région à la fin du XIXème siècle

大河原　香穂
Kaho OKAWARA
東京外国語大学博士前期課程
Master's Program, TUFS
E-mail: okawara.kaho.r0@tufs.ac.jp

ふらんぼー(Flambeau) vol.43 2017, p.87-102.
原稿受理 2017-12-04；最終版 2017-02-05

抄録
本研究は、19 世紀末のクロワッサンと呼ばれる地域、リムーザン地域、ラングドック地域の方言において、*ALF* で確認することのできる 3 つの名詞 ciseau, râteau, oiseau の単数、複数の区別について扱ったものである。この研究の目的は、同地域において、現代の標準フランス語同様に、複数形が単数形の役割も果たすようになったことで単数形と複数形が同形態になっていたのか、あるいは単数形と複数形が異なった形態だったのかを明らかにすることである。調査結果の分析から、調査対象の語についての単数、複数の区別の傾向が 2 つの地域で異なることがわかった。この地域の北部では、現代の標準フランス語同様に、複数形が単数形の役割も兼ねることで単複同形になった。この地域の南部では、ciseau に関しては、もともとの単数形が保存されたことにより単数形と複数形は異なった形態であった。そして râteau と oiseau に関しては、標準フランス語とは異なった理由で単複同形になった。

Résumé
Notre recherche porte sur la distinction entre le singulier et le pluriel des mots « ciseau, râteau, et oiseau » en dialecte dans la région dite du Croissant, dans le Limousin et dans le Languedoc à la fin du XIXème siècle sur l'*Atlas linguistique de la France*. Le but de cette recherche est de savoir si, dans cette région, les formes du singulier et du pluriel sont isomorphes (suite à un remplacement de la forme du singulier par la forme du pluriel, comme en français standard), ou si elles ne sont pas isomorphes. En analysant les résultats, nous pouvons dire qu'il y a deux zones. Dans le Nord de cette région, comme en français standard, les formes du singulier et du pluriel sont devenues isomorphes car la forme du pluriel a remplacé celle du singulier. Dans le Sud de cette région, pour le mot « ciseau », les formes du singulier sont différentes de celles du pluriel parce qu'elles ont été conservées. Enfin, pour les mots « râteau » et « oiseau », nous avons trouvé que les formes du singulier et du pluriel sont isomorphes, mais que la cause est différente de celle évoquée plus haut pour le français standard.

キーワード
方言学、フランス語、単数、複数

© ふらんぼー Flambeau 43 (2017) pp.87–102.
183-8534 東京都府中市朝日町 3-11-1 東京外国語大学フランス語研究室
183-8534 French Section, Tokyo University of Foreign Studies, 3-11-1 Asahi-cho Fuchu City, Tokyo
本稿の著作権は著者が保持し、クリエイティブ・コモンズ表示 4.0 国際ライセンス(CC-BY)下に提供します。
https://creativecommons.org/ licenses/by/4.0/deed.ja

1. はじめに

今日の標準フランス語では、名詞の単数形と複数形の間で名詞そのものの形態が異なるということはまれである。綴りについては、確かに単数形と複数形の間で違いが存在する。例えば本研究で扱う語の 1 つである「鳥」という意味の男性名詞 oiseau の例を考えると、単数形は oiseau と綴り、複数形は oiseaux と綴るため、綴り上は単数形と複数形の間に複数を意味する-x が存在するかしないかという違いが存在する。しかしながら、この oiseau という語について音声的側面から見ると、単数形も複数形も[wazo]と発音する。すなわち、単数形と複数形の間に名詞そのものの音声的な違いは存在しないということである。しかしながら、このような名詞とは異なり、単数形と複数形との間に音声的な違いが存在する名詞も確かに存在する。例えば、「馬」と言う意味の cheval や、「動物」という意味の animal が該当する。これらの名詞 cheval, animal の単数形と複数形は、それぞれ cheval, animal、そして chevaux, animaux と綴るため、綴り上の違いが存在する。しかし、これらの名詞 cheval, animal については、加えて単数形と複数形との間に音声的な違いも存在し、単数形は[ʃəval], [animal]、複数形は[ʃəvo], [animo]と発音される。とはいえ、現代の標準フランス語においては名詞の単数、複数の区別を行う際には名詞そのものの音声が不変化のものが大多数である。

しかしながら、*Trésor de la langue française informatisée* の oiseau の項目には、「鳥」を意味する男性名詞 oiseau の単数形の古形である oisel という語が載っている。この語は綴りから[wazɛl]という発音が予測される。このことから、古い時代のフランス語では、現代の標準フランス語とは異なり、単数形を[wazɛl]、複数形を[wazo]と発音していたのではないかと考えられる。すなわち、oiseau という名詞に関して、昔は単数形と複数形とで音声的な違いが存在していたということである。

ここで、規範的なフランス語から方言に焦点を移すと、現代の標準フランス語では名詞の単数形、複数形の音声的な違いはあまり見られないが、標準フランス語の規範には則っていない方言では、名詞の単数形、複数形で発音が異なる現象が見られるのではないかと考えられる。ましてや、先に述べた oiseau のように、昔は単数形、複数形で音声的な違いが存在したが、現代では単数形、複数形で音声的な違いが消滅したと考えられる語があるということを考慮すると、方言においてこのような語の単数形、複数形の音声的な違いが保存されていた可能性は十分に考えられる。

これらの事実から、本研究においては 19 世紀末のクロワッサンと呼ばれる地域とその周辺地域において、名詞 ciseau, râteau, oiseau の単数形、複数形の区別がどのようであったのかということを扱う。クロワッサンと呼ばれる地域は、Jochnowitz(1973 : 29-30)の記述からもわかるように、1870 年代に Charles de Tourtoulon と Octavien Bringuier が実地調査を行う中で発見した、北仏のオイル語地域と南仏のオック語地域の間の移行地域である。クロワッサンという名称の由来は、この移行地域の形が三日月のような形をしていることにある。「3. 調査対象」の章では、本研究で扱う資料や語、地域について詳しく説明すると同時に、このクロワッサンと呼ばれる地域の具体的な位置や、同地域における言語的特徴にも触れる。

本研究に関連する研究として、、Tuaillon(1971)の研究が挙げられる。この研究では、*Atlas linguistique de la France* を用いて 19 世紀末のフランス全域において名詞 cheval の単数、複数の区別がどのようであったのが調査されている。ここで扱われている名詞 cheval は、本研究の調査対象の 3 つの語 ciseau, râteau, oiseau とは異なり、現代の標準フランス語において単数形と複数形の間に音声的な違いが存在する。しかし、これらの名詞の語源を考えると、共通点を見出すことができる。名詞 cheval は、接尾辞 -ALLUS を持つラテン語の第 2 変化の男性名詞 CABALLUS を語源に持ち、名詞 ciseau, râteau, oiseau は、接尾辞-ELLUS を持つラテン語の第 2 変化の男性名詞 CISELLUS, RASTELLUS, AVICELLUS を語源に持つ。すなわち、これらの語は接尾辞の部分が互いに似た形態の語を語源に持つということである。このことから、Tuaillon(1971)の研究は、本研究の問題にとって参考になる研究だと考えられる。とはいえ、ciseau, râteau, oiseau の 3 つの名詞の方言における単数、複数の区別について調査した研究は未だに存在しないため、これらの名詞を本研究で扱うことは意義があると考えている。

ところで、本研究では語の音声表記のために音声記号を多用しているが、前もってここで扱う音声記号について言及しておく。参考資料として扱ったものの中には国際音声記号(以下 IPA)ではなく、フランス言語地図音声記号やロマンス語学音声記号で表記している資料が多く存在するが、本研究では全ての音声表記を IPA に表記し直して用いている。

以下では、まず背景説明として現代の標準フランス語における名詞 ciseau, râteau, oiseau の単数形、複数形の区別と、その歴史的変遷について言及する。それから、調査対象とする資料、語、地域について言及し、調査方法について説明する。そして調査を行った結果とその議論に触れ、最後に結論を提示する。

2. 現代の標準フランス語における 名詞 ciseau, râteau, oiseau の単数形、複数形の区別とその歴史的変遷

2. 1. 現代の標準フランス語における 名詞 ciseau, râteau, oiseau の単数形、複数形の区別

現代の標準フランス語では、名詞の単数形と複数形との間に発音上の区別が存在しない場合が多い。この事実は本研究で扱う 3 つの名詞 ciseau, râteau, oiseau についても言うことができる。まず ciseau の例をとりあげる。ciseau は単数では「のみ」という意味であり、複数では「はさみ」という意味である。ciseau の単数、複数それぞれの綴りは単数 ciseau、複数 ciseaux であるが、発音はどちらも[sizo]である。次に râteau, oiseau という語の例をとりあげる。râteau は「熊手」という意味の語であり、oiseau は「鳥」という意味の語である。この 2 つの語についても、単数、複数それぞれの綴りは単数 râteau, oiseau、複数 râteaux, oiseaux であるが、発音はどちらも[ʀɑto], [wazo]である。これらの事実を表にまとめると以下のようになる。

図 1. 現代の標準フランス語における名詞 ciseau, râteau, oiseau の単数、複数の区別

	綴り		発音	
	単数形	複数形	単数形	複数形
ciseau	ciseau	ciseaux	[sizo]	[sizo]
râteau	râteau	râteaux	[ʀɑto]	[ʀɑto]
oiseau	oiseau	oiseaux	[wazo]	[wazo]

このように、本研究で扱う ciseau, râteau, oiseau の 3 つの語も例にもれず、単数形、複数形の間に名詞そのものの発音の違いは存在しない。すなわち音声的には単数形も複数形も同じ形態である。

2. 2. 名詞の単数、複数の区別の歴史的変遷

ここまで現代の標準フランス語の名詞の単数形、複数形の区別について説明してきたが、ここで本研究で扱う 3 つの名詞 ciseau, râteau, oiseau の単数、複数の区別の歴史的変遷に焦点を移す。Regula(1955: 129-130)によれば、これらの名詞については、古仏語では単数と複数とで異なった形態が存在していたことがわかる。そもそもフランス語の名詞の単数形、複数形は、それぞれラテン語の名詞の対格の単数形、複数形を語源に持つため、当初は異なった形態だった。しかしながら、ある時から複数の形態が、もともと担っていた複数形としての役割に加え、単数形の役割も兼ねるようになった。そのため、本来の単数の形態と、本来の複数の形態の両者が単数形として使われるという現象が起きた。このような状況は 17 世紀まで続いたが、最終的には複数の形態によって単数の形態が駆逐された。そして、現代の標準フランス語では、単数形と複数形が完全に同形態になったのである。

ここで、本研究で扱う 3 つの名詞 ciseau, râteau, oiseau の単数、複数の区別の歴史的変遷について具体的にとりあげる。まず oiseau の例を考える。今でこそ単数形も複数形も[wazo]だが、かつては単数形として[wazɛl]という形態が存在し、[wazo]という形態は複数形のみを表していた。しかしながら、複数形の[wazo]という形態は、徐々に単数形の役割も兼ねるようになって行った。最終的には本来の単数形の形態[wazɛl]を駆逐し、現代の標準フランス語のように単数形も複数形も[wazo]になったのである。

他の 2 つの語 ciseau, râteau もこの oiseau と同様に考えることができる。ciseau, râteau についても、かつては単数形として[sizɛl], [ʀɑtɛl]という形態が、複数形として[sizo], [ʀɑto]という形態が別々に存在した。しかしながら、徐々に[sizo], [ʀɑto]が単数形の役割も担うようになり、結果的に、もともと単数形を表していた[sizɛl], [ʀɑtɛl]という形態は駆逐された。そして、現代の標準フランス語では単複同形になったのである。これら 3 つの語の標準フランス語における単数、複数の区別の歴史的変遷を図示すると以下のようになる。

図 2. 標準フランス語における名詞 ciseau, râteau, oiseau の単数、複数の区別の歴史的変遷

	単数形	複数形
ciseau	[sizɛl]	[sizo]
râteau	[ʀɑtɛl]	[ʀɑto]
oiseau	[wazɛl]	[wazo]

➡

17 世紀まで

	単数形		複数形
ciseau	[sizɛl]	[sizo]	[sizo]
râteau	[ʀɑtɛl]	[ʀɑto]	[ʀɑto]
oiseau	[wazɛl]	[wazo]	[wazo]

➡

現代

	単数形	複数形
ciseau	[sizo]	[sizo]
râteau	[ʀɑto]	[ʀɑto]
oiseau	[wazo]	[wazo]

また、完全な単複同形になるまでに、語末の母音の長短で単数、複数を区別する段階も経ている可能性もあるが、その前段階ですでに複数形が単数形の役割も兼ねるようになっていたことが考えられる。Rousselot&Laclotte(1913 : 137-138)の記述から、パリ方言において語末の母音の長短による単複の区別が見られることがわかる。Sibille(2016 : 2)によれば、本研究でも扱っているオック語のリムーザン方言においても同様の区別が見られる [1]。しかし、Tuaillon(1971 : 140-141)によれば、複数形が単数形の役割も果たすようになり、単複同形になったことで、その代償として語末の母音の長短で区別を行うようになる現象がよく見られる。このことから、語末の母音の長短で単複の区別を行う段階を経て完全に単複同形になるためには、その前段階ですでに複数形が単数形の役割も果たすようになり単複同形になっている必要があると考えられる。

これらことから、本研究では、もともと複数形の役割しか持たなかった形態が単数形の役割も果たすようになったことで単複同形になったという現象が、方言においても見られるのか否かに着目する。従って、本研究におけるリサーチクエスチョンは、名詞 ciseau, râteau, oiseau に関して 19 世紀末のクロワッサンとその周辺地域の方言では、もともとの複数形が単数形の役割も兼ねるようになり、もともと単数形を担っていた形態が駆逐され、単複同形になっていたのかということである。

3. 調査対象

3. 1. 調査対象とする資料

本研究での調査では、言語地図を調査対象の資料とする。具体的には Jules Gilliéron による *Atlas linguistique de la France*（以下 *ALF*）という言語地図である。*ALF* はヨーロッパにおけるフランス国内のロマンス語圏のうち、コルシカ島を除く全ての地域を対象にした言語地図であり、フランス言語地図音声記号 Alphabet Rousselot-Gilliéron [2]

[1] Sibille(2016 : 2)は、「足」という意味の語 pied について、リムーザン方言では単数形 le pied を/lu pe/、複数形 les pieds を/lu: pe:/とする区別を例に挙げている。

[2] Gilliéron(1902 : 19)の *Atlas linguistique de la France : Notice servant à l'intelligence des*

によって語の音声が表記されている。Chambers&Trudgill(2004 : 16-17)によれば、*ALF* を作成するにあたって実際に実地調査を行ったのは、Jules Gilliéron の弟子にあたる Edmond Edmont であったことがわかる。Edmond Edmont は 1896 年から 1900 年の間にフランスの各地を訪問して実地調査を行い、語の方言形の音声を記述した。そして、最終的に 1902 年から 1910 年の間に 1 巻から最終巻である 14 巻までが出版された。本研究では 19 世紀末の方言を対象としているが、その理由は調査対象の資料の *ALF* では 19 世紀末の方言が扱われているためである。

3. 2. 調査対象とする語

本研究で対象とする語は、単数では「のみ」、複数では「はさみ」を意味する ciseau、「熊手」という意味の râteau、そして「鳥」という意味の oiseau である。これらの 3 つの語を研究対象とした選んだ理由は 2 つある。

1 つ目の理由は、これらの 3 つの語は、語末の形態が共通しており、対照に適しているからである。現代の標準フランス語では、これらの 3 つの語は全て語末に-eau という綴りを持ち、この部分は[o]と発音される。この特徴は、これらの 3 つの語が全てラテン語の第 2 変化の男性名詞で、接尾辞-ELLUS を持つ語を語源に持つことに起因する。具体的には、ciseau の語源は CISELLUS であり、râteau の語源は RASTELLUS であり、そして oiseau の語源は AVICELLUS である。上記ではラテン語の主格の単数形の形態を語源として示したが、厳密にはこれらの 3 つの語のもともとの単数形、複数形は、それぞれラテン語の対格の単数形、複数形から変化した。すなわち、ciseau の単数形の語源は CISELLUM、複数形の語源は CISELLŌS であり、râteau の単数形の語源は RASTELLUM、複数形の語源は RASTELLŌS であり、oiseau の単数形の語源は AVICELLUM、複数形の語源は RASTELLŌS である。このように、これら 3 つの語について、もともとの単数形は語末が-ELLUM である語を、複数形は語末が-ELLŌS である語を語源に持っていた。

2 つ目の理由は、これらの 3 つの語は単数形、複数形それぞれの語形の言語地図が *ALF* に存在するためである。*ALF* 内に単数形、複数形それぞれの語形の言語地図が揃って存在する語は大いに限られている。

実際に本研究で扱っている言語地図は、ciseau に関しては地図番号 295 の ciseau ciseaux という地図である。この地図では単数形として使われている形態と複数形として使われている形態のそれぞれを確認することができる。râteau に関しては地図番号 1132 番の râteau râteaux という地図を扱っている。この地図でも、単数形として使われてる形態と複数形として使われている形態のそれぞれを確認することができる。oiseau については、他の 2 つの語 ciseau、râteau のように、単数形として使われている形態と複数形として使われている形態を一緒に確認できる地図は存在しなかった。しかし、oiseau の単数形、複数形それぞれで個別に地図が存在していたため、それら 2 つをあわせて研究に用いた。単数形の地図として用いたのは地図番号 938 番の oiseau という地図である。こ

---

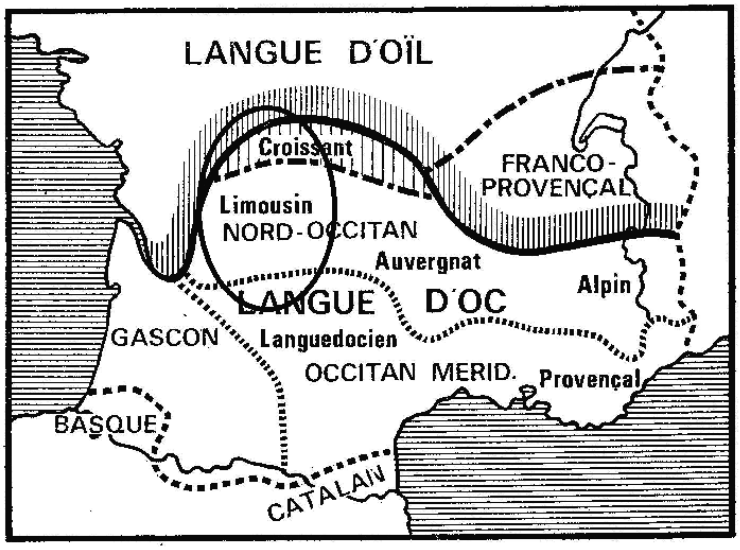
cartes の解説を参照。

の地図には単数形として使われている形態しか載っていない。複数形の地図として用いたのは地図番号 939 番の d'oiseaux という地図である。この地図には前置詞 d'と複数形の oiseaux のそれぞれの方言形が載っているが、このうち名詞 oiseaux の部分に着目し、複数形として使われている形態を調べた。

3. 3. 調査対象とする地域

本研究で対象とする地域はクロワッサンとその周辺地域である。本研究で実際に扱う地域は以下の図に示した。この図は Bec(1973 : 22)の M*anuel Pratique d'Occitan Moderne* における方言区分の地図を引用したものであり、黒い円で囲んで示した部分が本研究で扱っている地域を大まかに示している。

図 3. Bec(1973 : 22)における方言区分の地図の引用と本研究で扱う地域



CARTE n° 1 — LES DIALECTES OCCITANS.

ここで用いた Bec(1973 : 22)の地図と、地図内に黒い円で大まかに示された本研究で対象としている地域を照らし合わせ、本研究で調査対象とする地域の方言区分について考える。地図内の黒い円で示している箇所からもわかるように、本研究ではオイル語地域の一部、クロワッサンの西部、そしてオック語のリムーザン方言の地域の一部、ラングドック方言の地域の一部を対象にしている。

ところで、本研究で対象とする地域には、クロワッサンの一部が含まれているが、ここでクロワッサンにおける言語的特徴と、同地域の具体的な位置について触れておく。クロワッサンにおける言語的特徴については、Bec(1973 : 15-16)が M*anuel Pratique d'Occitan Moderne* の中で言及している。その記述によれば、クロワッサンでは、北仏のオイル語と南仏のオック語の間の中間的な特徴が見られるということがわかる。また、クロ

ワッサンの具体的な位置については、方言区分の際に引用した Bec(1973 : 22)の地図 [3] で確認することができる。この地図において、オイル語 langue d'oïl の地域とオック語 langue d'oc の地域のちょうど間に存在する、Croissant と表記されている地域がまさにクロワッサンに該当する。

上記ではクロワッサンと呼ばれる地域の詳細について言及したが、本研究ではクロワッサン全域を調査対象としている訳ではない。調査対象の地域に含まれているのはクロワッサンの西部、すなわちクルーズ県とアリエ県の県境より西側に限定されている。そのため、クルーズ県とアリエ県の県境よりも東側の地域は本研究では扱っていない。アリエ県より東側の地域を調査対象から除外した理由は、アリエ県より東側の地域はフランコプロヴァンス語地域に接しているためである。フランコプロヴァンス語地域では、他の地域では見られない複雑な音声変化や、意味は同じでも他の地域で使用されている語とは語源が異なる語がよく見られる。そして、クロワッサンの東部はフランコプロヴァンス語地域と接触しているため、フランコプロヴァンス地域のように、複雑な音声変化や、意味は同じでも他の地域で使用されている語とは語源が異なる語が見られることが想定される。これらのことを考慮すると、もともとの複数形の形態が単数形の役割も担うようになったことにより、単複同形になったのか、否かということをリサーチクエスチョンとしている本研究において、語形がもともとの単数形の形態なのか、複数形の形態なのか判別が困難である場合が予測されるこの地域を扱うことは不適当だと考えたため、クロワッサン東部は調査対象から除外した。

この北仏のオイル語地域と南仏のオック語地域のちょうど間の地域を調査対象として選んだ理由は、調査対象の名詞の単数と複数の区別の方法の傾向が北仏と南仏とで異なる可能性があり、両者の間の地域では興味深い結果が見られるのではないかと判断したためである。このような可能性は Tuaillon(1971)の研究結果から考えることができる。Gaston Tuaillon は、フランスの方言で、名詞 cheval の単数、複数の区別がどのようになされていたのかという問題を扱った研究を、*ALF* を用いてすでに行っている。この研究の結論の 1 つとして、名詞 cheval に関して、単数、複数の区別の傾向が北仏のオイル語地域と南仏のオック語地域で異なるという結果が提示されている。具体的には、北仏では複数形がもともとの単数形に代わって単数形の役割も兼ねるようになったことで単複同形である傾向が見られ、南仏ではもともとの単数の形態と複数形の形態がそのまま保存されている傾向が見られたということである。Gaston Tuaillon の研究で扱われている名詞 cheval は、本研究の調査対象の 3 つの語 ciseau, râteau, oiseau と異なり、現代の標準フランス語において単数形と複数形とで音声が異なる。しかし、これらの名詞は、接尾辞の部分が互いに似ている形態の語を語源に持つ [4]。そのため、ciseau, râteau, oiseau についても、cheval と同じような状況が見られる可能性を考えることができる。

また、本研究では、他の方言区分の地域に比べ、南仏のオック語地域内の地点を多く扱っている。その理由は、オック語地域では、現代の標準フランス語における名詞

---

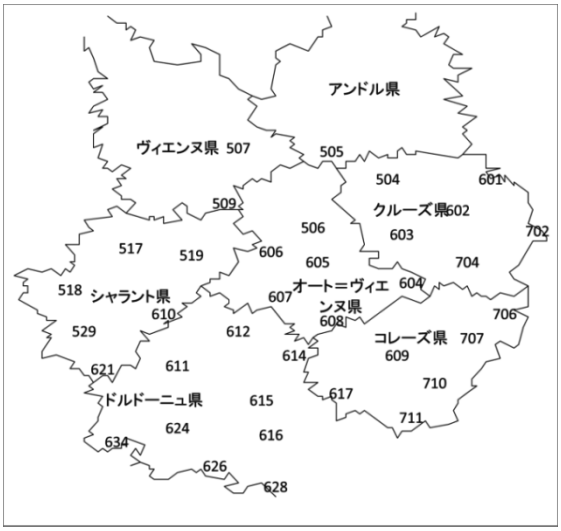
[3] 図 3 を参照。

[4] cheval の語源は接尾辞-ALLUS を持つ CABALLUS であり、ciseau, râteau, oiseau の語源は接尾辞-ELLUS を持つ CISELLUS, RASTELLUS, AVICELLUS である。

の単数、複数の区別の方法とは異なる、興味深い単数、複数の区別の方法が見られる可能性が考えられるためである。この予測についても、前述のように Tuaillon(1971)の研究結果から考えることができる。

ALF における調査対象地域内の地点数は全部で 36 地点である [5]。実際の地図上でのこれらの地点番号の配置は以下に図示してある。

図 4. 本研究で扱う地点



4. 調査方法

本研究の調査では、まずもともとの単数形の形態と、もともとの複数形の形態をそれぞれ予測した。それから、言語地図上の各地点において、事前に予測したもともとの単数形、もともとの複数形の形態と照らし合わせながら、単数形として表記されている形態がもともとの単数の形態なのか、それとももともとの複数の形態なのかを考察した。各地点において複数形として表記されている形態についても同様に考察した。このような調査を行った理由は、本研究におけるリサーチクエスチョンは、調査対象の地点において、複数形が単数形の役割も果たすようになったことによって、単複同形になったか、否かということであり、各地点で表記されている形態が、もともとの単数形なのか、それとも複数形なのか見分けるための指標が必要だと考えたためである。

もともとの単数形の形態と複数形の形態の予測をするにあたって、歴史音声学的な手法を用いた。具体的には、Lanly(1971)と Laborderie(1994)の記述から、ciseau, râteau, oiseau のもともとの単数形の形態、複数形の形態の語源であるラテン語からの音声変化を確認した。そして、どのような形態が単数形の音声変化の体系に属すのか、どのような形態が複数形の音声変化の形態に属すのかを確認し、それらをそれぞれもともとの単数形として予測される形態、もともとの複数形として予測される形態とした。なお、本研究で扱う、単数形、複数形の区別がどのように行われているのかという問題に主に

[5]具体的な地点番号は、504、505、506、507、509、517、518、519、529、601、602、603、604、605、606、607、608、609、610、611、612、614、615、616、617、621、624、626、628、634、702、704、706、707、710、711 である。

関わるのは語末の部分であるため、ここでは語末の部分のみに着目する。ciseau, râteau, oiseau の語源からの音声変化は以下の通りである[6]。

図 5. ciseau, râteau, oiseau のラテン語からの音声変化

	lat. cisellum		lat. cisellos
s.	lat. rastellum	pl.	lat. rastellos
	lat. avicellum		lat. avicellos
	↓		↓
	[tsiˈzɛlo]		[siˈzɛus]
	[rasˈtɛlo]		[rasˈtɛus]
	[ɔiˈdzɛlo]		[ɔiˈzɛus]
	↓		↓
	[tsiˈzɛl]		[siˈzɛaus]
	[raˈtɛl]		[raˈtɛaus]
	[ɔiˈdzɛl]		[ɔiˈzɛaus]
	↓		↓
	[siˈzɛl]		[sizɛˈaus]
	[rɑˈtɛl]		[ratɛˈaus]
	[waˈzɛl][7]		[ɔizɛˈaus]
			↙↘
		[sizeˈos]	[siˈzjos]
		[rateˈos]	[raˈtjos]
		[wɛzeˈos]	[weˈzjos]
		↓	↓
		[sizøˈos]	[siˈzjo]
		[ratøˈos]	[raˈtjo]
		[wɛzøˈos]	[weˈzjo]
		↓	
		[siˈzo(s)]	
		[raˈto(s)]	
		[wɛˈzo(s)]	
		↓	
		[siˈzo]	
		[ʀɑˈto]	
		[waˈzo]	

[6] 本研究で着目する語末の部分は、表中では下線で示されている。

[7] 本来であれば[waˈzɛl]に変化する前に[weˈzɛl]という過程を経ているが、この段階の音声変化は本研究における本題に大きく関わる訳ではないため、表中では[weˈzɛl]の段階を示していない。

このような手法をとることで、ciseau, râteau, oiseau について以下のことが予測される。

もともとの単数形として予測される形態 : [-ɛlo] [-ɛl]
もともとの複数形として予測される形態 : [-ɛa̯u] [-eo] [-ø̨o] [-o] [-jo]

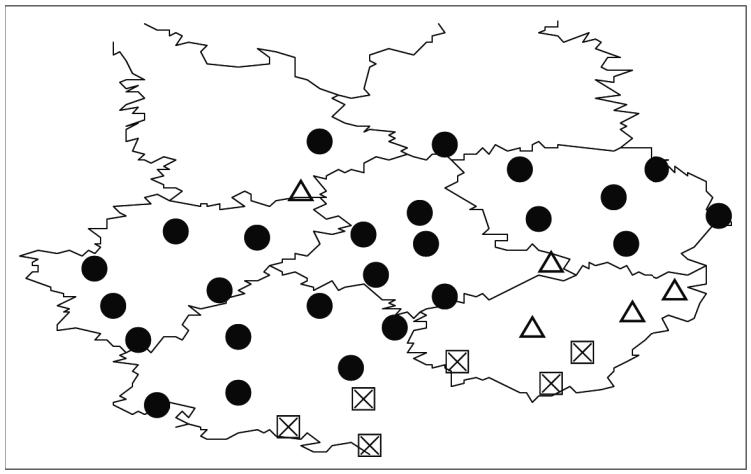
5. 調査結果と議論

5. 1. ciseau, râteau, oiseau の調査結果

ciseau, râteau, oiseau それぞれの語の言語地図についての調査結果は、以下の 3 つの地図に示した通りである [8]。これらの地図中の各地点に表示されている記号の意味は次にまとめた。

●: 複数形が単数形の役割を兼ねるようになったことによって単複同形になった地点
（現代の標準フランス語において起こった現象と同様の現象が起こった地点）
⊠: 現代の標準フランス語と異なり、もともとの単数形がそのまま保存され、単数形と複数形で異なる形態が見られる地点
×: 標準フランス語とは異なる理由で単複同形になったと考えられる地点
△: ●、⊠、×のどれにも分類できない地点

図 6. ciseau の調査結果



[8] 第 2 形が見られる地点では、第 2 形についても分析を行ったため、第 1 形と第 2 形それぞれの分析の結果を示す 2 つの記号が表示されている。

図 7. râteau の調査結果

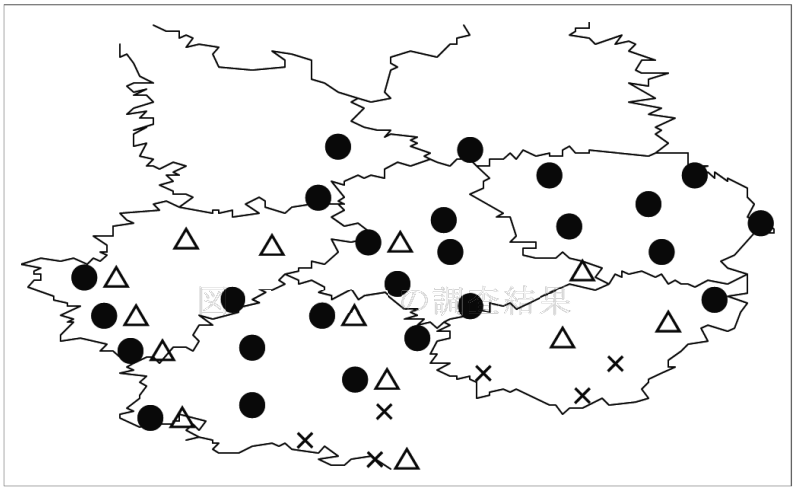
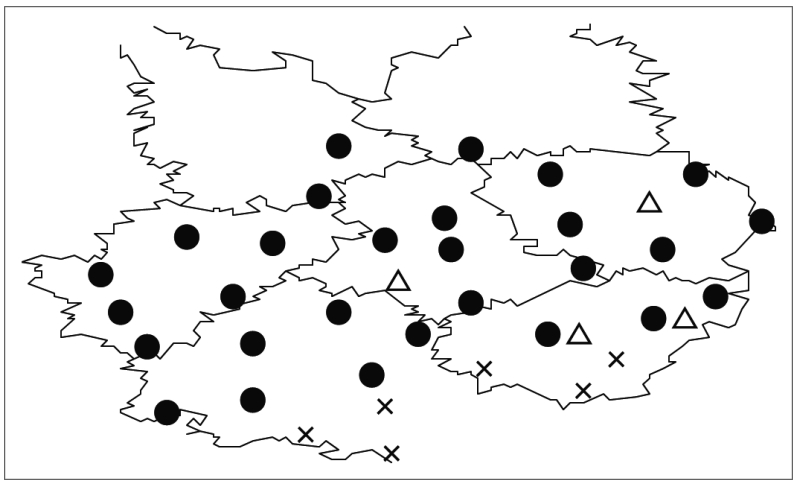


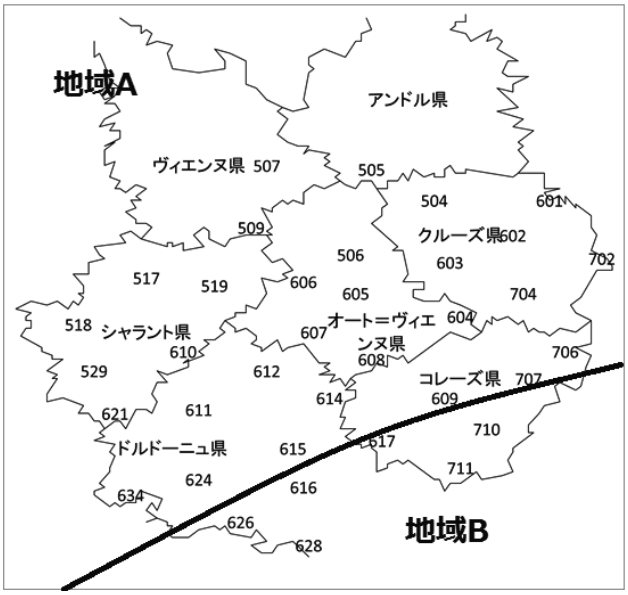
図 8. oiseau の調査結果



この結果から、本研究の調査対象地域は、ciseau, râteau, oiseau の単数と複数の区別について異なる傾向を持つ 2 つの地域に分けることができると考えられる。すなわち南端の 6 地点 [9]を除く地点と、南端の 6 地点である。この 2 つの地域を以下ではそれぞれ前者を地域 A、後者を地域 B と呼ぶことにする。この 2 つの地域の位置関係を、それぞれの地点番号と共に図示すると次のようになる。

[9] 具体的な地点番号は 616、617、626、628、719、711 である。

図. 9　地域 A と地域 B



地域 A では ciseau, râteau, oiseau の 3 つの名詞について、複数形が単数形の役割も果たすようになったことにより、単複同形になった現象が多く見られた。地域 B では、ciseau についてはもともとの単数形がそのまま保存されたことにより、単数形、複数形で異なる形態が見られ、râteau, oiseau については現代の標準フランス語とは異なる理由で単複同形になっていた。

5. 4. 調査結果についての議論

これらの調査結果を踏まえて議論すべき問題が 2 つある。1 つ目は地域 A と地域 B の 2 つの地域の間で、ciseau, râteau, oiseau の単数形、複数形の区別について傾向の違いが見られる理由である。2 つ目は râteau, oiseau の調査結果において、地域 B において単複同形である理由である。

まず、調査対象の 3 つの名詞の単数、複数の区別について、2 つの地域の間に傾向の違いが見られる理由は、オック語におけるリムーザン方言とラングドック方言の境界が関係していると考えられる。「3. 3. 調査対象とする地域」の章でも述べたように、本研究の調査対象地域には、オック語圏のうち、リムーザン方言の地域の一部とラングドック方言の地域の一部が含まれている。調査対象地域のそれぞれの地点番号について、具体的な方言区分を以下に地図と表で示しておく [10]。

---

[10] Bec(1972 : 22-23)による M*anuel Pratique d'Occitan Moderne*、Rosenqvist(1919 : 101, 122-123)による« Limites administratives et division dialectale de la France »、Brun-Trigaud(1992 : 23-52)による« Les enquêtes dialectologiques sur les parlers du Croissant : corpus et témoins »を参照した。

図. 10 調査対象地域の地点番号と方言区分（地図）

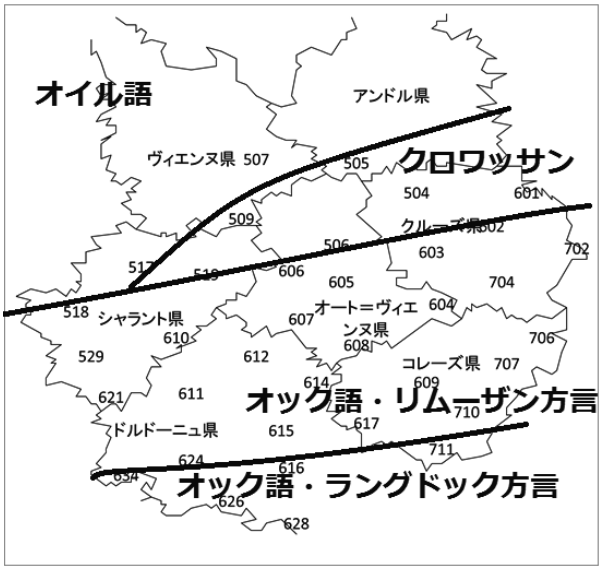


図. 11 調査対象地域の地点番号と方言区分（表）

オイル語地域		507, 517
クロワッサン地域		505, 504, 506, 509, 519, 601
オック語地域	リムーザン方言	518, 529, 602, 603, 604, 605, 606, 607, 608, 609, 610, 611, 612, 614, 615, 617, 621, 624, 702, 704, 706, 707, 710
	ラングドック方言	616, 626, 628, 634, 711

上記のことから、オック語のリムーザン方言とラングドック方言の境界を確認することができる。この境界線と、調査対象の 3 つの名詞の単数、複数の区別の傾向に違いの見られる地域 A と地域 B の 2 つの地域を分ける線 [11]を照らし合わせると、両者は一致しないものの、地理的に近い関係にあり、何らかの関係がある可能性を考えることができる。

次に、râteau, oiseau の調査結果において、地域 B、すなわち南端の 6 地点で単複同形になっている理由には、ラングドック方言に特有の音声変化が関係していると考えられる。*ALF* からもわかるように、râteau, oiseau の単数形、複数形は共に[-εl]あるいは[-el]という形態である。一見すると、事前に行った予測から、単数形も複数形も、もともとの単数形の形態に思われるかもしれない。しかし、Tuaillon(1971 : 134)の記述によれば、ラングドック方言の含まれる中部オック語地域では、語末の-l と内破音の l はそのまま保存される傾向にある。このことから、râteau, oiseau について、地域 B において単数形、複数形が共に[-εl]あるいは[-el]という形態であることは、単数形の語源 RASTELLUM,

[11] 図 9 を参照。

AVICELLUM、複数形の語源 RASTELLŌS, AVICELLŌS のそれぞれが音声変化を経て、結果として偶然同じ形態に変化したことに起因する可能性が考えられる。しかしながら、ここではこの問題についてたった 2 つの語の例を扱ったにすぎないため、断定することは難しい。そのため、今回は可能性を指摘するだけにとどめておく。

6. 結論

本研究におけるリサーチクエスチョンは、名詞 ciseau, râteau, oiseau に関して 19 世紀末のクロワッサンとその周辺地域の方言でも、現代の標準フランス語同様に、複数形が単数形の役割も果たすようになったことにより、単複同形になっていたのかという問いであった。このリサーチクエスチョンについての結論は、地域 A、すなわち南端の 6 地点を除く地域と、地域 B、すなわち南端の 6 地点とで異なる。地域 A では ciseau, râteau, oiseau の 3 つの語について、複数形が単数形の役割も兼ねるようになったことで、単複同形になった地点が多く見られた。すなわち、地域 A は現代の標準フランス語で起こった現象と同様の現象が多く起きた地域である。しかしながら地域 B では、ciseau と râteau, oiseau で結論が異なる。ciseau については、現代の標準フランス語で起こった現象は起こらず、もともとの単数形が保存され、単数形と複数形で異なる形態であった。しかしながら、râteau と oiseau については、現代の標準フランス語とは異なる理由で、単数形と複数形が同形態であった。

本研究のリサーチクエスチョンに対する結論は以上であるが、この問題についてはまだまだ議論の余地がある。例えば、地域 B について、なぜ ciseau についてのみ異なる傾向が見られたのかという問題や、本研究では調査対象外であった地域や語では、どのような傾向が見られるのかという問題などが挙げられる。これらの問題に取り組むことで、また新たな発見がある可能性もあるため、今後もこのテーマを掘り下げていきたい。

参考文献

BEC, Pierre. (1973). *Manuel Pratique d'Occitan Moderne*, Paris : Picard.

BRUN-TRIGAUD, Guylaine (1992). « Les enquêtes dialectologiques sur les parlers du Croissant : corpus et témoins », *Langue française, n°93, 1992. Enquête, corpus et témoin*, Paris : Larousse

CHAMBERS, J. K. et al. (2004). *Dialectology*, Cambridge : Cambridge University Press.

GILLIÉRON, Jules. (1901). *Atlas linguistique de la France*, Paris : Editions du CNRS.

GILLIÉRON, Jules. (1902). *Atlas linguistique de la France : Notice servant à l'intelligence des cartes,* Paris : Honoré Champion.

JOCHNOWITZ, George. (1973). *Dialect Boundaries and the Questions of Franco-Provençal*, Paris : Mouton.

LABORDERIE, Noëlle. (1994). *Précis de Phonétique Historique*, Paris : Nathan.

LANLY, André. (1971). *Fiches de philologie française*, Paris : Bordas.

REGULA, Moritz. (1955). *Historische Grammatik des französischen*, Heidelberg : Carl Winter Universitätsbuchhandlung.

ROSENQVIST, Arvid. (1919). Limites administratives et division dialectale de la France, *Neuphilologische Mitteilungen*, Helsinki : Modern Language Society.

ROUSSELOT, abbé P. et al. (1913). *Précis de prononciation française,* Paris : Didier / Paris-Leipzig : Welter.

SIBILLE, Jean. (2016). *Le marquage du nombre dans le parler occitan des Ramats*, Toulouse : Université de Toulouse II -Le Mirail.

TUAILLON, Gaston. (1971). Analyse d'une carte linguistique: « cheval-cheveaux » (ALF 269), *Travaux de linguistique et de littérature ; 9,1*, Paris : Klincksieck

ZINK, Gaston. (1989). *Morphologie du français médiéval*, Paris : Presses Unicersitaires de France